

「おぼゆ」「思ほゆ」「思はる」の用法

유춘희*

— 目 次 —

- 1.はじめに
2. 先行研究の検討
3. 「おぼゆ」の用法
 - 3.1. 自発の場合
 - 3.2. 受身の場合
 - 3.3. 可能の場合
4. 「思ほゆ」の用法
5. 「思はる」の用法
- 6.まとめ

[日文抄録]

古典語「おぼゆ」は、動詞「思ふ」に助動詞「ゆ」が承接した「思ほゆ」を以前形態とし、「思ほゆ」は「ゆ」を先行形態とする「る」が承接してできた「思はる」と意味的な違いがない。これらの「おぼゆ」「思ほゆ」「思はる」についていわゆる自発・可能・受身の用法で働く想定して、『源氏物語』の中に出現する用例を中心にその用法を考察してみる。それらを通じて、『源氏物語』の中での役割分担の関係についても解釈してみた。その結果、「おぼゆ」と「思ほゆ」は用法上の違いがさほどないが、その反面「おぼゆ」(「思ほゆ」)と「思はる」は自発と受身という用法で対立している。つまり、「おぼゆ」(「思ほゆ」)がある状況や事件が自然に実見されるといった自発の用法に使われているとすれば、「思はる」は登場人物の意識した動作や作用が主体や述語によって影響を受けるという受身の用法に使われている。これらは『源氏物語』の中で自発と受身とが対立する対照的關係、あるいは自発と可能のすきまを受身が補完する相補的關係にあることで説明できる。小論では、三つの言葉の文中での働きに焦点をおいて

* 仁荷大學校 研究教授. yuch33@naver.com

相補的關係にあることと捉える。

キーワード: 「思ほゆ」, 「思はる」, 「おほゆ」, 自発, 対照的關係, 相補的關係, 役割分担

1.はじめに

古典語「おほゆ」は一般的に「思ふ」に助動詞「ゆ」が承接した「思はゆ」が「思ほゆ」と変化し、平安初期に成立した語である。それで「思ほゆ」は「おほゆ」の以前形態と捉えられる¹⁾。また、「思ほゆ」の「ゆ」が助動詞「る」の以前形態であること²⁾を考慮すると、「思はる」もあって、「おほゆ」「思ほゆ」「思はる」は意味的に密接な関係にあると言える。

平安時代の文学作品の中で「思ほゆ」「思はる」「おほゆ」の用例が同時に出現するのは『源氏物語』に見られる程度であり、他の作品ではほとんど現れない³⁾。また、これらの言葉を同じレベル上において検討した研究もほとんどない。この三つのことばの中で一番多く研究されているのは「おほゆ」で⁴⁾、「おほゆ」は一般的に「ひとりでに思い浮かぶ」⁵⁾という意味上自発の

1) 『日本語源大辞典』、『日本国語大辞典』、『広辞苑』、『広辞林』、『明鏡国語辞典』など。辞典類では大部分「おもほゆ」から変化した語と説明している。

2) 助動詞「ゆ」は、「る」の先行形態で、先行研究では文法的な性質や意味がほぼ同一なものと扱っており(辻村(1959)、西田(1964)、峰岸(1968)、吉田(1977)などがある。)、形式的・客観的・状態的という概念で説明できるし、状態性を表す客観的な性格を示す語である。「ゆ」の性格と直接関連する研究については柳(2006)、p.297に詳しい。

また、長瀬(1973)は、造語の成分「ゆ」が「自発動詞」なので、「おほゆ」「聞こゆ」「見ゆ」などの「ゆ」が結合した語も「自発動詞」と読んだ。

3) 平安時代の作品である『源氏物語』『土佐日記』『蜻蛉日記』『枕草子』『紫式部日記』『更級日記』『大鏡』『落窪物語』『堤中納言物語』『宇治拾物語』『宇津保物語』を調べてみたが、『源氏物語』以外に三つの語の用例がともに出現する作品はほとんどない。『源氏物語』の中で「おほゆ」は770例、「思ほゆ」は20例、「思はる」は22例が出現している。これらの用例の収集は直接調査による。

語意を有することから、主に自発の用法で使われるのが推測できる。ところが、文中で「おぼゆ」が出現する場面を重視しながら解していくと、可能か受身かで説明できる場合があると言え、可能でありながら自発で解されるのが自然な場合がある。こうした側面から「おぼゆ」にはいわゆる自発・受身・可能の用法があると想定できる。そうであれば、「思ほゆ」「思はる」が「おぼゆ」の以前形態であることを考えると、これらの言葉にも「おぼゆ」と同じく自発・受身・可能の用法があると想定できる。つまり、「おぼゆ」「思ほゆ」「思はる」は用法面で同一な枠に属するものであり、すくなくとも「自然に思われる」「思うことができる」「人から思われる」といった意味を表すことばである。

小論では、これらの三つの言葉に着目して、平安時代の作品の中で三つのことばが同時に出現する『源氏物語』を対象とし⁶⁾、これらが使われている場面を重視しながらいわゆる自発・可能・受身の用法について検討してみることにする。それらを通じて、「おぼゆ」「思ゆる」「思はる」の『源氏物語』の中での役割分担の関係についても明らかにしてみたい。

2. 先行研究の検討

「おぼゆ」「思ほゆ」「思はる」を同じレベルに捉えて検討した研究はないが、関連性があるものをみると、次のようなものがある。

まず、石川(1956)は、「おぼゆ」は「思ふ」に「ゆ」が承接して生じた語で、次の用例について、

-
- 4) 「おぼゆ」に関する研究には、慶野正次(1936. pp. 101~103)、石川徹(1956. pp. 42~46)、藤川照三(1973. pp. 86~87)、森田良行(1992. pp. 259~261)、柳(1996、2005、2016)などがある。
- 5) 柳(2005)、p. 200による。
- 6) 『源氏物語』は、秋山虔・阿部秋生・今井源衛校注・訳(1982)、『日本全集、源氏物語』、小学館を考察対象にした。

(a)ありし時雨のやうたらむに、いかで琵琶のねのおぼゆるかぎりひきて聞かせむとなむある。

(『更級日記』、205、p.341:5、『全集』)

(b)「しかしか、いと興有ることなり、いでおぼえ給へ。時々さるべき事のさしいらへ、繁樹もうちおぼえ侍らむかし」

(『大鏡』、p.38:15、『全集』)

(c)我こそ、父君の恋しくおぼえ給ふに、え在るまじくおぼゆれ。

(『宇津保物語』、宴卷、『大系』)

のように、(a)(b)は自発ないし可能の「ゆ」で受身の「ゆ」ではない。(c)は自発ないし受身の「ゆ」であり、けつして可能の「ゆ」ではない「おぼゆ」がある。(pp.42~46)⁷⁾

と説明して、「おぼゆ」に自発・可能・受身の用法がありうることを示唆している。

また、此島(1973)は、

(d)年老いたる尼君など、まださらにかかる人の御有様を見ざりしつれば、「この世のものともおぼえたまはず」と聞こえあへり。(『源氏物語』、若菜、p.298:8)

の例をあげて、「「思ほゆ」は平安朝になって形態的には全く一動詞「おぼゆ」となったが、しかもその意味においてはかなり後まで本来の受身の意を失っていかなかった。」⁸⁾と、「おぼゆ」に受身の意味が存在していることを指摘している。

以上のように、先行研究を踏まえてみると⁹⁾、少なくとも「おぼゆ」に

7) 石川(1956)、pp. 42~46による。

8) 此島(1973)、p. 100による。

は、自発・可能・受身の用法があることが想定できる。でも、前述したように「おぼゆ」の語義が「自然に思い浮ぶ」ということを考慮すると、先行研究の指摘とは異なってくる点がある。では、「おぼゆ」が使われている場面を重視しながら「おぼゆ」のいわゆる自発・可能・受身の用法について検討してみる。

3. 「おぼゆ」の用法

3.1 自発の場合

1) 占者「その中に違い目ありて、つつしませたまふべきことなむはべる」と言ふに、わづらはしくおぼえて、「みづからの夢にはあらず、人の御ことを語るなり。この夢合ふまで、また人にまねぶな」とのたまひて…(若菜、p.308:7)

2) 並びたまへりしをりは、とりどりにて、さらに似たまへりとも見えざりしを、うち忘れては、ふとそれはとおぼゆるまで通ひたまへるを、…(早蕨、p.337:6)

1)の場合は、源氏が不思議な夢を見占者に合わせているところである。占者が「その運勢の中には、相違した点(意に反する事態)があつて謹慎なさるべきこととございます」ということを聞く源氏は、藤壺の懐妊のこともあつて、その夢の解釈はやっかいなことであると思われて、「自分の夢でもない…」と言ひ訳している場面である。「おぼゆ」は、話しを聞くことからひとりでにわずらわしくなる心情を表すところに用いられている。2)の場合は、大君が亡くなったあと、大君と中の君がそろっている時は、それぞれで違つていて、その上、似ているとも見えなかったが、大君がなくなったこと

9) 「おぼゆ」の先行研究については、柳(2016)、pp. 166~168に詳しく述べている。

を忘れて、ふと中の君のすがたを見るとそれが大君ではないかと思われるほど似ているという薫の心情を描写している場面である。「おぼゆ」は、見ているその場で、登場人物自身も思い知らず瞬間的に浮んでくる気持ちを表すところに用いられている。

このように「おぼゆ」は、その場において登場人物の悲しさ、しみじみとした気持ちや心情(感情)を表す場面の中に使われている。すなわち、ある対象から感じられる心情、気持ちなどの心的態度が思い浮かぶことで、「おぼゆ」は、「現在~がひとりで思い浮かぶ」「おのずからそのようになる」と自発の用法で働いている。また、

3) 尼君「何ごとぞや。童べと腹立ちたまへるか」とて、尼君の見上げたるに、すこしおぼえたるところあれば、子なめりと見たまふ。(若菜、p.280:12)

3)の場合は、源氏が虐病で悩み、聖が住んでいる北の山へ加持を受けに行った時、かいま見ることによって、初めて若菜を見る場面である。源氏がかいまみている所には、女房が二人、女の童、これから先が思いやられる女の子が見える。その女のそばで泣いている。その時、尼君が話しながら見上げていた顔だちを見たその瞬間、それによく似ている女の子が思い浮かんでその女の子が尼君の子らしいと推測している。「おぼゆ」は、尼君を見ていることから瞬間的にみた女の子が連想されるところに使われている。この場合の「おぼゆ」は、見たことがある人や過去の出来事が思い浮かんでくることを表す場面の中に見られる。3)の場合の「おぼゆ」は、見たことがある人や過去の出来事が思い浮かんでくることを表す場面の中に見られる。そこで、1)2)の「おぼゆ」は、単に人の感情・気持ちを表すところに焦点をおいた場合ばかりではなく、過去の出来事や人に焦点を当てた場合も、ある対象から感じられる気持ちや心情がひとりでそのようになる、あるいは、自然に思い浮かばれるという自然自発的なことばとして用いられている。

3.2 受身の場合

4)まして内には、年老いたる尼君たちなど、まださらにかかる人の御ありさまを見ざりつれば、「この世のものともおぼえたまはず」と聞こえあへり。(若菜、p.298:8)

5)「公さまは、すこしたはれて、あざれたる方なりし、ことわりぞかし。これは才の際もまさり、心用る男々しく、すくよかに、足らひたりと世におぼえためり」などのたまひてぞ対面したまふ。(藤裏葉、p.429:3)

4)の場合は、源氏が虐病を直した北の山へ行って帰還するとき、別れをする場面である。法師や童が残念に思われていると同時に、奥にいる年老いた尼君たちも残念な気持ちであることを描写している。5)の場合は、内大臣が藤の宴のことによせて夕霧を招待、内大臣の邸に到着した夕霧を対面する前に北の方や女房などに宰相(夕霧)のことを話している場面である。この4)5)の「おぼゆ」に対して4)の場合を、「源氏は、この現世のものとも、人に考えられなさらぬ」¹⁰⁾と、5)の場合を、「宰相(夕霧)が世間から思われているようだ」¹¹⁾と受身の用法で捉えている。すなわち、[源氏が尼君たちにおぼゆ][宰相が世の中の人におぼゆ]と受身の形式である[XがYにV]に着目して、源氏、宰相が「尼君たちに思われる」「世の中の人に思われる」の影響を受けていると捉えていることであろう。また、例えば、4)の場合、「おぼえたまふ」における敬語「給ふ」は、尼君が源氏に対する敬語であり、「おぼゆ」は、「思い浮かぶ」で自発の場合である。このとき、「源氏が尼君から思われなさる」における敬意がどこに置かれるかに焦点をおいて[誰が誰に]ととらえると受身になる。したがって、敬意による人的関係が、受身として捉えられる要因に成り得る。

しかし、4)5)場面から、4)の場合は、これまで尼君たちは、源氏のように

10) 此島(1973)、p. 100による。

11) 山岸徳平校注訳『日本古典文学大系、源氏物語3』、岩波書店、p. 392による。

すぐれた方の様子を見たことのない。それゆえに、自分たちも思わず「この世の人とは思われない」と浮んで来たことである。5)場合は、話し手(内大臣)からみた時、「この宰相は学問の才もすぐれており、心がけも男らしく、しっかりしていて、ととのえていると世の中から思われているらしい」と推測している部分である。4)5)の場合における「この世のものともおぼえたまはず」「これは~足らひたりと世におぼえためり」は、話し手(考え手)である尼君・内大臣が、心の中から浮んでくる源氏宰相に対する気持ちを表したことである。すなわち、表現主体(話し手や考え手)の心的内容であり、尼君たち、内大臣の源氏、宰相に対する評価である。例えば、尼君たちが考えるとき源氏に対する感情がプラス的な評価を表していることである。「おぼゆ」は、尼君たち、内大臣の心理的な状態を考慮すると、現在その場で起こる心的態度を表明しているところに使われているのである。

受身とは、「他から動作、作用をし及ぼされて、それを受けとめる意を表す」¹²⁾あるいは、「その述語の表す事態を惹き起こしたものの存在が意識されている」¹³⁾ことである。このとき、[XがYにV]の表現形式だけに焦点をおくと、述語の表す事態を惹き起こしたものの存在が意識されているので受身と見られるが、話し手や考え手の心理的な状態を生かして意味をとれば、述語の表す事態を惹き起こしたものの存在が意識されていない。すなわち、誰かによってそのような結果であるという点がない。または、[Z(話し手や考え手)が、XがYにV]の場合においてもZの心理的な面に焦点を当てると、[XがYにV]ことがあるけれども、そのことが誰かによってなされた結果であるという点がないので受身的な性格が見えない。そこで、「おぼゆ」における自発か受身かは、「おぼゆ」が登場人物の心理的な面を考慮するか表現形式を考慮するかのことである。小論では、「おぼゆ」が登場人物のその場の心的態度を表す場合に多く使用されていることに着目して、感情や気持ちがその場で浮んでくることを示している自発の用法として捉えることにする。そこで、4)5)は、登場人物の心理的な面を生かして自発の用法で使われてい

12) 吉田(1974)、pp. 181~182による。

13) 寺村(1986)、p. 273による。

と思われる。

3.3 可能の場合

6)源氏「かくこまかにはあらで、ただおぼえぬ穢らひに触れたるよしを奏したまへ、いとこそたいだいしくはべれ」と、...

(夕顔、p.249:2)

7)近き世界に、ものの心を知り、来し方行く先のことうちおぼえ、とやかくやとはかばかしう悟る人もなし。

(明石、p.218:7)

6)の場合は、夕顔が亡くなった後二条院へ戻ってきた源氏はすごく苦しんでいる。その時帝からもお使いがあり、頭中将もお見舞してきた。その頭中将に乳母が病弱でお見舞しに行ったが、そこで、下人が咳病でなくなったという内容の言い訳をする場面である。「くわしくではなく、考えることができない穢れに出会った旨を申し上げてください」と話しているところである。7)の場合は、明石で源氏の一行が暴風雨に会ったあと静まっているときの場面で、一行の状況を「この須磨の近所界隈には物事の道理を得て居て、過去の事も未来の事も、考える事ができ、この天変の由来を、どうだこうだとはっきり(明確に)悟る人間はない」と描写している場面である。6)7)の「おぼゆ」に対して山岸氏(『大系』)は、可能の用法として捉えている¹⁴⁾。しかし、6)は<~頼みにする人も思い浮ばない>、7)は<ただ思われない穢れ>と「おぼゆ」を自発の用法として捉えても文意にはかわりがない。6)7)の「おぼゆ」が自発か可能かについて、まず、形態的に7)の場合を除いてほとんどが否定のかたちをしており、不可能を表す場合に集中している。また、6)の前後文脈の状況を見ると、6)は、兵部の君が「思ひ続ける」という状態とい

14) 『大系』にはその外、次の用例についても可能として捉えている。

*十七日の月さし出でて、河原のほど、ものもつかしきも何ともおぼえたまはず、かき乱る心地したまひて、あはし着きぬ。(夕顔、p. 252:5)

うように、登場人物が「~している状態」である。すなわち、「可能態というのは状態性の表現、自発態というのは出来事の表現だから…」¹⁵⁾とボイス的な面からも状態性の表現として可能にもなり、あるいは、その場の出来事として自発にもなる。そこで、「おぼゆ」が不定の形をする、状態性の中にある、などの傾向性を考慮しても、自発か可能かははっきり区別することができない¹⁶⁾。6)7)の場合の「おぼゆ」が利用されている場面は、登場人物がその場の状況で、ただ「おぼゆ」という事態が起きるか起きないかということを表している。そこには、登場人物の意志などは入っていない。したがって、自発として捉えられる。ところで、「思い浮ぶ」から「思い浮ぶ事ができる」という自然可能の場合も考えられる。6)7)の場合、広義には自発であるが、狭義には自然可能として、自発と可能の両方の場合を認めることにする。

これまで、「おぼゆ」のいわゆる自発・受身・可能の用法があると想定して検討してみた。「おぼゆ」のいわゆる自発・受身・可能の用法における文中で表現形式が[XがYにおぼゆ]をしていることで、受身の用法として捉えている場合があり、登場人物に意志が入っていると考える可能の用法として捉えている場合がある。しかし、登場人物の心理的な面を考慮すれば、「おぼゆ」は、表現形式や意志と関係なしにその場でひとりでの起こる心的態度と関連することで、自発として捉えられる。ただし、可能の場合においては、文意に大きな違いのない限り自然可能としても捉えられる。

「おぼゆ」は少数の自然可能の場合を含んでほとんどが人の感情・気持ち・考えなど過去の人や出来事を表す表現の中で、自然にそういう状態になる、または、自然に浮んでくるというときの「ひとりでの思い浮ぶという現状」

15) 寺村(1986)、pp. 275~276による。

16) 山岸氏があげている用例は不定のかたちをする場合が多い。中右(1991)には、現代語で自発態と可能態が重なることに対して中間態として扱っている。「中間態とは総称的だから、主語は不定性を備えていなければならない、というのは誤解である。文の総称性のための決め手は、述部の性質せある」と述部が不定のかたちをするので、自発か可能かとは無関係であることを指摘している。p. 76による。

で、自発の用法として使われている。

さて、「おぼゆ」のいわゆる自発・受身・可能の場合を考えると、平安時代における自発・受身・可能・尊敬の助動詞「る・らる」とかかわる場合がある。例えば、

8)よそのさし 離れたらん 人にこそ、よしともあしとも おぼえられ
たまへめ。(東屋、p. 60:7)

のように、「おぼゆ」に「らる」が付いたケースである。『大系』には、「られ」を尊敬といているが、『全集』には語法不審、『評釈』には自発かとも見ている。この場面は、浮舟が左近少将との結婚がだめになって中将の君が畏服の姉である中の君のところに浮舟を預けておいたが、匂宮が浮舟を見つけて言い寄ることがあったあと、浮舟の嘆きかつ浮舟を慰める場面である。この内容は、浮舟の話の一部分である。「おぼゆ」が自発的に使われている点ではこれまでの「おぼゆ」と変りがないと思われる。『評釈』でのように「おぼえられ」が自発かと思えば、「おぼゆ」と関連する自発の表現には、「おぼゆ」形と「おぼえらる」形が生じる。とすれば、この時代の「おぼゆ」の用法について再考して見る必要性がある。また。「る」「らる」は「ゆ」より時代が遅れて成立している¹⁷⁾。したがって、「ゆ」には、すでに自発・受身・可能の「る」「らる」の意味が含まれていると思われる。そこで、8)のような言い方がたまに現れた場合かどうかについては、他の作品で調査も必要であるので今後詳しく述べる。

4. 「思ほゆ」の用法

17) 西田(1964)、時枝(1973、pp.58~77)、吉田(1974)、柳田(1989)、辻村(1959)などがある。

「思ほゆ」は、「おぼゆ」の以前形態として主に上代に使われていた。特に、上代語としての「思ほゆ」は、和歌の中に多く用いられており、「<思ふ>に<ゆ>のついた<思ほゆ>も、主体のその状態をもたらす対象の威力を讃め称える意味を持っている」¹⁸⁾、または、「率直に表現するところや感情の積極的な所で情趣的、抒情的で用いられていることば」¹⁹⁾と、その性格と意味に対する研究があるが、ここでは、前述のように「おぼゆ」の用法と類似関係にあることばとして捉えることにする。

9) 君はいとあはれと思ほして、「いはけなかりけるほどに、思ふべき人々の、うち捨ててものしたまひにけるなごり、はぐくむ人あまたあるやうなりしかど、親しく思ひむつぶる筋は、またなくなん思ほえし。」(夕顔、p.213:4)

10) 思へどもなほあかざりし夕顔の露に後れし心地を、年月経れど思し忘れず、ここもかしこもうちとけぬかぎりの、気色ばみ心深き方の御いどましさに、け近くうちとけたりし、あはれに、似るものなう恋しく思ほえたまふ。(末摘花、p.339:5)

11) 風肌寒く、ものあはれなるにさそはれて、筆の琴をいとほのかに掻き鳴らしたまへるも奥深き声なるに、いとど心とまりはてて、なかなか思ほゆれば、琵琶をとり寄せて、いとなつかしき音に想夫恋を弾きたまふ。(横笛、p.343:3)

12) 日曇れぬべしと、内にも外にももよほしきこゆるに、心あわたたしく、いづちならむと思ふにも、いとはなかなく悲し、とのみ思ほえたまふに、御車に乗る大輔の君といふ人の言ふ…(早蕨、p.352:12)

9) 場合は、源氏が病弱している浮母のところにお見舞いを行ったとき、浮母に「母親がなくなった後、育てる人がおおぜいいるようだったが、その中

18) 佐藤(1989)による。

19) 五味(1941)による。その外、「思ほゆ」と関連する研究には、内田(1983)、野村(1970)、長瀬(1987)がある。

に一番親しくなじんでいた点では、おのずからあなたがかけがえのない人であると思われる」と自分の心情を話す場面に「思ほゆ」が使われている。10)の場合は、源氏がなくなった夕顔に対する忘れられない気持ちを描写している場面である。源氏は、長い年月夕顔のことを忘れられない。それは、他の方(六条御息所など)がうちとけなく張り合っているのに、夕顔だけは自分に対してすごく近くてうちとけたので、そのことがしみじみと比べることができないほど恋しく思われることを描写している。11)の場合は、夕霧が一条宮を訪れた時、宮が琴を鳴らしていることに心が傾けられて、自分も思わずにそうする気になってしまい(自然に何か足りないと思われる)、自分も想夫恋を弾くようになることを描写している場面である。12)の場合は、中の君が匂宮の邸へ上京する前に自分の憂えの心情を表現した場面である。「もう日がくもれます」と内から外から催促しているので中の君の心はあわただしく、どこへ行くのであろうと思うことも、大変頼りなく悲しく思われるだけであるという状態を描写している。

9)~12)の場面は、主に登場人物がある出来事や状況に対して、ひとりでの浮かんでくる感情や気持ちを表現したものであり、「思ほゆ」は、自然自発的に実現することを示すことばとして働いている。本物語に見られる「思ほゆ」は、すべてが登場人物の気持ちや心境を表す場面の中で自発の用法として用いられていることに集中している。「思ほゆ」は、意味用法における「おぼゆ」とほぼ同じである²⁰⁾。では、「思ほゆ」の用法をもっと詳しく検討するために文体的な面からもみってみる。

20) 「思ほゆ」の場合における、①なげの御すさびにても、おしなべたる世の常の人をば目とどめ耳たてたまはず、世にすこしこれは思ほえ、心地にとまるふしあるあたりを尋ね寄りたまふものと人の知りたるに、かくひき違へ...(蓬生、p.343:9) ②親一ところは、見たてまつらざりしかば、恋しきことは思ほえず。(早蕨、p.342:15)のように、①は受身とも、②は不定のかたちをするので可能とも考えられるところである。しかし、「おぼゆ」の用法で説明したように登場人物の心理的な面を考慮すると自発になる。

4.1 文体面から見た「おぼゆ」と「思ほゆ」

4節で述べられたように「思ほゆ」と「おぼゆ」は、同一作品の中でほぼ同じ意味・用法で働いている。ここでは文体面での違いはないであろうかという点に着目してみよう。例えば、

13) 松風の吹き来る音も、荒ましかりし山おろしに思ひくらぶれば、いとのだかになつかしくめやすき御住まひなれど、今宵はさもおぼえず、椎の葉の音には劣りて思ほゆ。

(宿木、p.393:6)

例13)のように同じ場面に二つのことばが用いられている。それは、我々が文章を書く場合、同じ言葉を繰り返して書くことを避けるため、類似していることばを利用することより、何らかの使い分けがあるように見える。つまり、二つの言葉が用いられているのは、文体上の問題が関与していると考えられる。

4.1.1 同じ場面に出現する場合

まず、「おぼゆ」と「思ほゆ」が同一場面に出現する場合からみる。

14) 君はいとあはれと思ほして、「いはけなかりけるほどに、思ふべき人々の、うち捨ててものしたまひにけるなごり、はぐくむ人あまたあるやうなりしかど、親しき思ひむつぶる筋は、またなくなん思ほえし。人となりて後は、限りあれば、朝夕にしもえ見たてまつらず、心のままにとぶらひ参うづることはなけれど、なほ久しう対面せぬ時は心細くおぼゆるを、さらぬ別れはなくもがなとなん」などこまやかに語らひたまひて…、

(夕顔、pp. 213:4~6)

15)薫：手にかくるものにしあらば藤の花松よりまさる色を見ましや。

とて花を見上げたる気色など、あやしくあはれに心苦しく思ほゆれば、わが心にあらぬ世のありさまにほのめかす。

藤侍従：むらさきの色はかよへど藤の花にえこそかからざろけれ。

まめなる君にて、いとほしと思へり。いと心まどふばかりは思ひいられざりしかど、惜しうおぼえたり。

(竹河、p.86:9~14)

14)の場合は、源氏が乳母のところにお見舞いに行ったとき、乳母に対する源氏の心情を話している場面である。「思ほゆ」の方は、源氏が乳母に対して、幼い時に親身になってくれる人々がなくなった後、育ててくれる人はたくさんいたようだったが、その中、乳母だけは心から親しくなじんだ関係だった点は比べるものがない(はなはだしい) ことと思われたというところに用いられている。「おぼゆ」の方は、源氏が大きくなることによって、身分上の制約もあり朝夕に拝見もできないし、思うままにお見舞いすることもできなかった、やはりそのように対面できない時は、ひとりで心細く思われたというところに使われている。

ここで、「思ほゆ」と「おぼゆ」は、登場人物である源氏の心情が自然自発的に実現するところに用いられていることは共通している。しかし、「思ほゆ」の方が、発話する時点から見たとき、「おぼゆ」の方より古い出来事を言及しているところに、「おぼゆ」の方は、現在に近い出来事を言及しているところに現れる。また、「おぼゆ」は「何々に対して、~と思われる」という言い方をしているが、「思ほゆ」は「何々に対して、何々は、~して、~と思われる」という言い方をしている。それで、ある状況を描写するのに「思ほゆ」が「おぼゆ」より古い出来事を言うところに、又は、説明的な言い方をしているところに使われている。

15)の場合は、大君(内侍の上の娘)が院のところに参ったことに対する薫の未練を描写した場面である。薫は、院と親しくしていたので出入りが自由であった。夕暮れの時、藤侍従(内侍の上の息子)とあちこち歩いている

と、大君がいる部屋の近くに五葉の松に、藤の花が美しく咲き垂れているのが見える。池水のあたりに座ってその花を眺めながら歌っている。藤侍従がその大君に未練を残している薫の気色などを見て<あやしいほどしみじみと心苦しく思われる>と言い方をしているところに「思ほゆ」が使われている。「おほゆ」の方は、藤侍従が薫のことを、ひどく心まよいほど打込んでいたわけではなかったが、<残念であるとは思われてきた>という言い方をしている。「思ほゆ」は「おほゆ」より詳しく感情描写をするところに用いられている。また、

16)松風の吹き音も、荒ましかりし山おろしに思ひくらぶれば、いとのだかになつかしくめやすき御住ひなれど、今宵はさもおほえず、椎の葉の音には劣りて思ほゆ。(宿木、p.393:6)

この場面は、匂宮が夕霧の娘である六の君と婚約し、邸に迎え取られることになったあと、中の君が宇治の山のことを考えながら自分の身の上を省み嘆くところである。匂宮とのこと、薫とのこと、自分の身の上のことなどを嘆いているという心理的な状況と、その邸に松風が吹いてきて音がする状態であるという空間的な背景が交じっている。中の君のいつもの心の状態としては、宇治の山に比べれば、松風がふいて来ることがのどかで気持ちよい住まいであるが、今宵だけは、そのようにも思われなく、椎の葉の音がする宇治の方がまさると思われるということを描写している。

まず、「おほゆ」の方は、今宵は、ただそのように思われないと登場人物が記憶している知識の中の「椎の葉の音」と現在の「松風の音」を比べて見た時、松風の音が椎の葉の音には劣るように思われると分析する言い方をしている。ここでの分析とは、中の君の意志が含まれていることではなく、心理的・空間的な環境から自然にそのように実現することである。したがって、「思ほゆ」は、いつもはAであるが、今宵はAよりBがましたという分析的な言い方をすることも用いられている。

4.1.2 同じ場面に出現しない場合

次は、「おぼゆ」と「思ほゆ」が同一場面に出現しない場合をみてみよう。

17) 思へどもなほあかざりし夕顔の露に送れし心地を、年月経れど思し忘れず、ここもかしこもうちとけぬかぎりの、気色ばみ心深き方の御いどましさに、け近くうちとけたりし、あはれに、似るものなう恋しく思ほえたまふ。(末摘花、p. 339:5)

18) 大将殿は、君たちを御車に乗せて、月の澄めるにまかだたまふ。道すがら、箏の琴の变りていみじかりつる音も耳につきて、恋しくおぼえたまふ。(若菜下、p. 194:12)

19) …、あことに故宮の御子にこそはありけれ、と見なしたまひては、限りなくあはれにうれしくおぼえたまふ。

(宿木、p. 481:3)

17)の場合は、源氏が夕顔に対する気持ちを年月がたっても忘れられない状態を描写している場面である。ここもあそこもうちとけない方ばかりであるのに、近くうちとけたその人(夕顔)のことがしみじみといとしく何に比べようがないほど恋しく思われることを描写している。すなわち、「思ほゆ」は、源氏が夕顔のことを恋しく思われる気持ちを描写することに六条御息所などはうちとけてないし、張り合っているのに、夕顔だけは、うちとけてくれたと説明する言い方をしている。

18)は、女樂が終わって若君たちをつれて帰る大将殿には紫の上の琴の音が耳に残っていて、それが恋しく思われることを描写、19)は、薫が弁の尼と対面して浮舟の話を聞いて、「身分が低いものでもこれほど大君に似ている人であつたら見逃さない、父宮から認めなかったけれど、その故宮の子ではないか」など考えるとひとりでに限りなくしみじみとうれしく思われること

を描写している。つまり、17)の場合は、<現在の状況で~して、恋しく浮んでくる>ことであり、18)の場合は、登場人物が浮舟に対して<~とみなした状況から自然に心情が浮んでくることだけを示すストレイト的な言い方をしているが、19)の場合は、源氏の気持ちを描写するのに、他の人(六条御息所など)に夕顔の行動を比べて叙述、そして「似るものなう恋しく思ほえたまふ」という言い方をしている。ここでも、17)は、18)19)のより説明的な言い方をしている。この説明的な言い方は、登場人物の感情をもっと積極的に表現するところに使われていると思われる。

その外に、「思ほゆ」は、

20)手をとらえて、「我にいま一度声をだに聞かせたまへ。いかなる昔の契りにかありけん、しばしのほどに心を尽くしてあはれに思ほえしを、うち棄ててまどはしたまふがいみじきこと」と、声も惜しまず泣きたまふこと限りなし。(夕顔、p. 253:4)

21)母北の方泣き騒ぎたまひて、「大政大臣をめでたきよすがと、思ひきこえたまへれど、いかばかりの昔の仇敵にかおはしけむ、とこそ思ほゆれ。…」(真木柱、p. 366:13)

20)は、亡くなった夕顔の死体を目の前にして話している場面であり、21)の場合も、式部卿宮の北の方が大政大臣に対して、「大政大臣をめでたきよすがと、思ひきこえたまへれど、」だが、「いかばかりの昔の仇敵にかおはしけむ」のような言い方で、自分の大政大臣に対する気持ちを話している場面である。「思ほゆ」は、亡くなった人や自分と仲がよくない人に対して自身の率直な心境を表す場合も使われている。また、

22)内裏に参りたまはんことは、うひうひしくところせく思しなりて、春宮を見たてまつりたまはぬをおぼつかなく思ほえたまふ。(賢木、p. 99:6)

23)何とも見ざりし山がつも、おはしまさで後、たまさかにさしの

ぞき参るは、めづらしく思ほえたまふ。(椎本、p. 195:13)

22)は、桐壺院が亡くなりになった後、自分も出家した立場であるので、内裏にまいろうとすることは馴れていないことであり、その上、春宮を拝見できない時は「おぼつかなく思われる」(気がかりであると思いうかぶ)と描写している。22)23)は、18)19)より固い雰囲気を描写するところや繊細な感情を表すところである。

これまで「思ほゆ」と「おぼゆ」は、意味・用法においてはほとんど一致していた。文体面で「おぼゆ」と「思ほゆ」は、登場人物の気持ち・心情・心境を表すことにおいて「思ほゆ」は「おぼゆ」より、説明的、分析的、固い言い方などをするとところに使われている。また、場面の中では、「思ほゆ」の方は「おぼゆ」より感情的なところに用いられていた。そこで、『源氏物語』の中で「思ほゆ」は、説明的・分析的な言い方や古い文体として完全に消えてしまうことではなく、「おぼゆ」より積極的に感情や気持ちを表現するところや抒情的なところに用いられていたのである。

5. 「思はる」の用法

では、「思はる」の用法は、どうであろうか。想定したとおりの自発・可能・受動の用法が存在しているのだろうか。次の例をみてみよう。

24)朝顔「故宮にも、いか心ごはきものに思はれたてまつりて過ぎはばりにしを、いまさらにまた世になびきはべらんも、いとつきなきことになむ」と聞こえたまひて、…

(少女、p.13 : 13)

25)ことにをかしき言の数を尽くさねど、さまのなまめかしき見なしにやあらむ、情なくなどは人に思はれたまはず。

(宿木、p.407:14)

26)月ごろは、またなく、世の常ならずかしづく、と言ひつるもの、うちつけにかく言ふもいかならむ、と思へども、なほ一わたりはつらしと思はれ、人にはすこし譏らるとも、ながらへて頼もしきことをこそと、いとまたく賢き君にて、思ひとりてければ、日をだにとりかへで、契りし暮にぞおはしはじめける。(東屋、p.26:8)

24)は、源氏が朝顔の姫君と贈答する場面である。女五の宮は、源氏と交際を進めているが、朝顔の君はきっぱりとした態度をとっている。自分は、故院にも頑固なものとして「思われた」(通じていた)のに、いまさら結婚することは、不似合わないことであるという朝顔の君の気持ちを表明している。25)は、薫が按察の君という人の局で夜過した後、その局から出る時「まことは、この空見たまへ。いかでかこれを知らず顔にては明かさんとよ。艶なる人まねにてはあらで、いとど明かしがたくなりゆく、夜な夜なの寝覚めには、この世かの世までなむ思ひやられてあはれなる」と言いまぎらわしくて出た場面で、薫の話が風情ある言葉の数を尽くさかったが、様子のみずみずしく優美にみなしたのであろうか情けない人であるなどは「思われぬ」と女房たちが考えている場面である。26)は、浮舟と婚約した左近少将は、浮舟が常陸介の実の娘ではないことを知り、乳母の妹にあたる介の実の娘に急にのりかえたところで、少将が、「今は相手(北の方)から冷たいと思われても」と考えている場面である。

24)~26)は、<朝顔自分が故院にそう思われた>、<薫が女たちにそう思われなかった>、<少将が北の方にひととおり冷たいと思われる>のように、登場人物(朝顔、薫、少将)が「故院にそう思われた」「女たちにそう思われなかった」「北の方にひととおり冷たいと思われる」と意識している。つまり、登場人物の心理的な面まで考慮しても、登場人物が「他人にそう思われる」と影響を受けている受身の場合である。また、

27)法師なれど、いと心恥づかしく、人がらもやむことなく世に思

はれたまへる人なれば、かるがるしき御ありさまをはしたなう思す。(若菜。p.285:2)

28)五六月過ぎて、中宮まかでさせたまふ。この御けしきはたさはいへどいとところせし。御辛ひのすぐれたまへりけるをばさるものにて、御ありさまの心にくく重りかにおはしませば、世に重く思はれたまへることすぐれてなんおはしましける。(少女、p.75:5)

29)垣代など、殿上人地下も、心ことなりと世人に思はれたる、有職のかぎりとのへさせたまへり。(紅葉賀、p.386:8)

27)は、源氏が瘡病で北の山に行き、その寺の法師に会ったときの場面である。「思はれたまへる」は、法師であるが、自分の方が気恥ずかしくなるほどで、人柄もなみなみならないと世の中から「お思われになる」人であるので、…と、源氏が考えたとき【法師が世の中から思われる】ということである。28)は、六条院が完成され、源氏とかかわる方々が六条院に移るところで、梅壺中宮が移る場面である。中宮は、幸運がすぐれているのはそれにして、人の様子が奥ゆかしく重々しくいらっしゃるので「世の中から重く思われていらっしゃる」ということ、29)は、朱雀院の舞楽の時である。垣代など、殿上人地下も非凡な者であると「世間の人から思われている」ということである。例えば、27)の場合と用例5)の場合における、5)の場合が、内大臣が見た時に宰相が世の中に思われていることであり、27)の場合は、源氏がみたとき【法師が世の中のの人に思はる】である。5)の場合は、内大臣が見た時そうであると評価していることであり、宰相は、自分が世の中から思われているかどうか意識していない。しかし、27)の場合は、法師が世の中の人から思われるという影響を受けており、法師自身も意識しているのである。つまり、27)~29)の「思はる」は、登場人物が世の中からそのように思われると意識している。また、法師、中宮の様子、垣代など、殿上人地下が「世の中から思われる」という影響を受けている。かつ、文中では「誰々が世の中から評判である」の意味を取りたいところでもある。

以上のように「思はる」は、もっぱら受身の場合に集中しており、自

発、可能の場合として用いられている場合がない。

6. まとめ

これまで、『源氏物語』の用例を中心として「おぼゆ」「思ほゆ」「思はる」のいわゆる自発・受身・可能の用法の場合について調べてみた。「おぼゆ」は、少数の自然可能の場合を除外してほとんどが「ひとりでに思い浮かぶ」現状を示していることばで、自発の用法に集中していた。それに、「思ほゆ」は、「おぼゆ」より積極的な感情を表すところや抒情的なところに現れるが、いわゆる自発・受身・可能の用法においては「おぼゆ」とほぼ一致している。「思はる」は、すべて受身の用法として使われていた。そこで、想定した「おぼゆ」「思ほゆ」「思はる」のいわゆる自発・受身・可能の用法の検討は、次のようにまとめられる。

<表-1> 『源氏物語』の中での「おぼゆ」「思ほゆ」「思はる」

	おぼゆ	思ほゆ	思はる
総用例数	770	20	22
自発	766	18	X
可能	(4)	(2)	X
受身	X	X	22

※ ()の数は、可能とも自発とも捉えられる場合である。

以上の結論からこれらの三つの言葉について用法上の関係を導いてみると、二つに解釈が下される。

A)対照的關係

「おぼゆ」は、表現形式だけ考慮する場合、受身と考えられる用法があ

り、主体の能力があると認める場合は、可能の用法にもなりうる。しかし、登場人物の心理的な面を考慮する場合は、二つともに自発の場合として捉えることができる。そこで、「おぼゆ」は、もっぱら自発の用法に集中することになる。そうすると、「おぼゆ」の方は、自発の用法に、「思はる」の方は、受身の用法に集中しており、可能の用法は、二つの語がともに関与しないと考えることができる。これは、「思ほゆ」と「思はる」の関係も同様である。すなわち、「おぼゆ」と「思はる」は、自発と受身で対立し、「おぼゆ」の方が登場人物にとってある状況や出来事が自然に実現するという自発の意味・用法として、「思はる」の方は、登場人物が意識し、動作・作用の主体と述語によって影響を受ける受身の意味・用法として働いている。

B)相補的關係

「おぼゆ」の用法に自発、可能の場合があり、受身の用法がないとすれば、二つの語「おぼゆ」と「思はる」における「思はる」の方は、「人・世の中に思われる」と受身の用法だけに用いられている。「おぼゆ」は、「思はる」が存在しているので、「おぼゆ」にない受身の用法を補充することになる。すなわち、「おぼゆ」の用法における三つの用法があるべきであるが、受身のところがあいていない。「思はる」は、その受身というすきまの部分の役割を担当することになり、二つの言葉は、自発・受身・可能の用法において相補的な役割分担が生じるのである。

小論では、B)のように解釈することにする。そこで、「おぼゆ」「思ほゆ」「思はる」は、物語の中で「おぼゆ」と「思ほゆ」は文体的な面で、「おぼゆ」と「思はる」は「自然に思われる」「思うことができる」「人から思われる」という意味・用法における役割分担をしていたのがわかる。

[ABSTRACT]

A Usage of 「oboyu」 and 「omohoyu」 and 「omoharu」
- Focused on the 「genjimonogatari」 -

Yu, Chun Hui

A classical verb 「oboyu」 in Japanese is a word from changing of 「omohoyu」, which is a verb 「omou」 connected with a auxiliary verb 「yu」, and a previous form of 「oboyu」. 「omoharu」, which was formed from connecting with 「ru」 that has the previous form of auxiliary verb 「yu」, has similarity with 「omohoyu」 in the character and meaning. In other words, 「oboyu」 「omohoyu」 「omoharu」 can be postulated as words used within the same boundary in their meaning and usage. 「oboyu」 「omohoyu」 「omoharu」 are intensively appeared in mainly 『genjimonogatari』 among literary works during Heian period of Japan. By the way, the cases that spontaneity is translated as possibility or passivity are found in the process of interpreting scenes. It can be postulated that 「omohoyu」 「omoharu」 have the same use of spontaneity, possibility, and passivity if 「oboyu」 has the use of spontaneity, possibility, and passivity. Based on these points, each usage of 「omohoyu」 「omoharu」 「oboyu」 was examined. The following result was found by comparing them. 「oboyu」 and 「omohoyu」 have little difference for the usage in 『genjimonogatari』 but they are in confrontation with each other over spontaneity and passivity. That is, 「omoharu」 is used as passivity that is influenced by the movement of characters while 「oboyu」 is used as spontaneity that a certain situation or event is naturally realized for its characters. To sum up, 「oboyu」 (「omohoyu」) and 「omoharu」 have a contrasting relation of spontaneity and passivity. 「omoharu」 has only role of passivity. That is, it can be interpreted that 「oboyu」 「omohoyu」 「omoharu」 have a complementary relationship and they share their roles.

Key Words: 「omohoyu」, 「omoharu」, 「oboyu」, passivity, contrasting relation, complementary relation, role sharing

参考文献

□ 単行本

- 此島正年(1973)、『助詞助動詞の研究、大系と歴史』、桜楓社、p. 100
 寺村秀夫(1986)、『日本語のシンタクスと意味 I』第5版、くろしお出版、pp.275~276
 長瀬 治(1987)、『古代語研究—ことばとフォークローア—』、桜楓社、p. 24
 吉田金彦(1978)、『上代助動詞の史的研究』、明治書院、pp. 181~182
 柳椿姫(2005)、『類似を表す表現の言葉』、不二文化、pp. 108~109、p. 200

□ 論文及び評論

- 慶野正次(1936)、「「おぼゆ」といふ語の再検討」、『国語解釈』11、瑞穂書店、
 p. 103
 石川徹(1956)、「平安時代語彙考証(その三)」、『平安文学研究』19-12、pp. 42~
 46
 五味保美(1941)、「万葉集詩句考—「おもほゆ」の性質」、『国語国文』4-11
 今泉忠義(1960)、「源氏物語の敬語法の一つ—「おぼえ給ふ」—」、『国学院雑誌』6、
 pp. 8~12
 後藤和彦(1973)、「上代語の助動詞「ゆ・しむ・す・ふ」の働きについて」、『研究年報』1
 7、pp. 21~36
 高橋太郎(1991)、「寺村秀夫における可能と自発」、『日本語学』2月号、pp. 34~42
 辻村敏樹(1959)、「『る』の研究—付『ゆ』—」、『国語学解説と教材の研究』4-2、
 pp. 55~67
 西田直敏(1964)、「可能、<含自発>の助動詞、る・らる<付、ゆ・らゆ>」、『国語学解
 釈と教材の研究』9-13
 柳田征司(1989)、「助動詞「ユ」「ラユ」と「ル」「ラル」との関係」、『奥村三雄退
 官記念、国語学論叢』、桜楓社、pp. 150~155.
 和田利政(1964)、「受身の助動詞、る・らる(付、ゆ・らゆ)」、『国文学解釈と教材』9-
 13、pp. 29~32
 柳椿姫(1996)、「平安時代に 있어서의 「おぼゆ」에 대한 고찰—유사의 의미를 나타내
 는 경우—」、『日語日文學研究』28、pp. 296~299
 柳椿姫(2016)、「古典語「おぼゆ」の意味—現代語「覚える」との置き換えを中心
 に—」、『日本文化学報』71、pp. 165~184

이 논문은 2016년 11월 4일 접수되어 11월 25일까지 심사받아 12월 19일 게재 확정됨.